

「呼びかけ」と「応答」としての「歴史」

—「歴史」概念をめぐるベルクソンとメルロ＝ポンティとの交差—

村上 龍

序

アンリ・ベルクソン (Henri Bergson, 一八五九—一九四一年) といえは、彼固有の時間概念である「持続」を最重要のキー・コンセプトとして終生、思索をすすめた哲学者である。しかし、そのことに鑑みれば意外なことに、一定の時間をつうじた人間の共同的な営みとしての「歴史」とベルクソン哲学との接点は、一見するときわめて希薄である。じつさい、彼は著作中では「歴史」を主題的に論じてはいない。

とはいえ、それはベルクソンの「歴史」概念が成りたちえないことを直ちに意味するものではないだろう^①。本稿の目的は、第一に、「歴史」概念をめぐるベルクソンを批判するモーリス・メルロ＝ポンティ (Maurice Merleau-Ponty, 一九〇八—一九六一年) の議論^②を、ただし本人の意図を裏切る仕方^③で手がかりにして、ベルクソン晩年の著作『道徳と宗教の二源泉』

(一九三二年)(以下では『二源泉』と略記する)のうちにそれとして言及されぬままに言わば内包されてある「歴史」の構想を明るみにすること、そして第二に、そのうえであらためて、ベルクソンの「歴史」の構想とメルロ・ポンティ的なそれとのあいだの關係を見定めること、である。

本稿の構成について手短かに述べておく。さいしょに第一節では、「歴史」概念をめぐってメルロ・ポンティがいかにしてベルクソンを批判するのかを確認する。ところで、この批判はもちろんメルロ・ポンティ自身の「歴史」の構想に立脚するはずである。そこで第二節では、「歴史」にかんする彼自身の議論を、可能な範囲内で視野に収める。しかるのちに、第三節では「二源泉」に目を転じて、メルロ・ポンティ的な形容しうる「歴史」の構想をそのうちからあぶりだし、さらには、その構想がベルクソンの「持続」概念のうちにすでに兆すものであったことを示す。さいごに第四節では、ベルクソンの「歴史」の構想とメルロ・ポンティ的なそれとのあいだの異同を明確にする。

以上の考察が首尾よくまとまれば、ベルクソン／メルロ・ポンティ的な意味での「歴史」が二人のあいだでまさに実演されたということが、明らかになるはずである。

第一節　メルロ・ポンティによるベルクソン批判

メルロ・ポンティがベルクソンの「歴史」概念を、より正確には、ベルクソン哲学における「歴史」概念の不在を批判するのは、コレージュ・ド・フランス教授に就任するにあたって行われた講演『哲学をたたえて』(一九五三年)、ならびに、ベルクソン生誕一〇〇周年を記念して開催された「ベルクソン会議」での口頭発表「生成するベルクソン」(一九五九年)においてのことである。³⁾

そのさい、メルロ・ポンティの念頭にあるのは、ベルクソンが神秘家の証言に依拠して神の問題にとり組んだ『二源泉』

である。彼は『哲学をたたえて』で次のように言う。

力である（神）と活動である生との二つの（力）のあいだに位置づけられる現実の人類は挫折にしか見えず、「理論上は起源に存在していたはずだ」とベルクソンの言う「神的な人類」の亡霊にすぎぬことになり、そうすると歴史、すなわち人間たちの共同的な（communicative）生も自律的な領域ではないということになる。ようするに、歴史は活動の狂乱と神秘的なものとのあいだをゆれ動くばかりで、それ自身のうちには導きの糸が見いだされないことになるのである（E.P. 20）。

ベルクソンのごとくに理論上、「神的な人類」を起源に措定するならば、「人間たちの共同的な生」ないし「歴史」はこの外的な原理に還元されてしまうために、これを自律的な運動として論じる視座が見失われてしまう。メルロ＝ポンティはそのように言うのである。

それでは、ベルクソンが見逃しているとされる「歴史」の「導きの糸」、すなわち「歴史」を駆動する内的な原理とはいかなるものか。この点については、「生成するベルクソン」の次の一節をみよう。

だが、自らがなすことの別なる成就を他人や後継者たちに期待せねばならないということは、ものを書く人々、行動する人々、あるいは公に生きる人々——つまりは、すべての受肉せる精神——にとつての残酷な掟である。「…」意味は解体の危険をおかしてつくり直される。「…」始まりが変身をとげ、成就される、そのような呼びかけ（appels）と応答（réponses）との綱の目「…」ベルクソンにおいては、「歴史に記入されること」の固有の価値もなければ、呼びかけ（appelantes）世代や応答する（répondantes）世代とらったものもない（S. 305-306）。

先行する世代が「呼びかけ (appels)」を發し、後続する世代は「応答 (réponses)」をかえす。ただし、「応答」がかならずや「呼びかけ」の意味を改変しつつこれを「別なる成就」へと結実させるかぎりにおいて、「呼びかけ」と「応答」とのあいだの関係は連続的にして非連続的であり、半面ではむしろ「応答」のほうこそがひるがえつて「呼びかけ」を一定の「呼びかけ」たらしめるものである。メルロー・ポンティの考えるところでは、ベルクソンの視角がとり逃がしてしまう「歴史」の内的原理とは、「呼びかけ」と「応答」との織りなすこうしたダイナミズムに他ならないのである。

このように、ともに五〇年代に上梓された『哲学をたたえて』および『生成するベルクソン』において、メルロー・ポンティは「二源泉」を念頭に、「呼びかけ」「応答」という「歴史」の内的原理をベルクソンが掴みそこねている点を指摘し、その結果としてベルクソン哲学において「歴史」概念が不在であることを批判する。

第二節 メルロー・ポンティ的な「歴史」の構想 (の一半)

上の批判は、当然のことながらメルロー・ポンティ自身の「歴史」の構想に立脚するはずである。とはいえ、ここで彼の「歴史」概念を網羅的に考察する余裕はない。本節では、『哲学をたたえて』が発表される二年ほど前にあたる一九五一年頃に執筆されたと編者が推定する未完の遺稿『世界の散文』(一九六九年)にそくする⁴かぎりで、この点をみることにする。

この遺稿の、すくなくとも「間接的言語」と題された章⁵における課題は、「諸芸術ないし言語を範例として」「真の意味での歴史の概念を見いだす」(P.D.M. 120)ことである。ただし、「諸芸術」とは言いながら、取りあげられているのはもっぱら絵画の歴史である。「洞窟の壁に描かれたさいしょの素描は、さまざまな探究のかぎりない未来を決定し」「…」絵画のかぎりない未来を呼び求めていた (appelant) (P.D.M. 101) と言ふメルロー・ポンティは、数万年にもおよぶ長大な絵画の歴史を以下のように記述する。

彼「画家」はけっして空虚のなかで無カラ創造するのではない。「……」超えながら継承し、破壊しながら保存し、変形しながら解釈する、ようするに、新しい意味を呼び求め (appellat) 予期していたものにそうした意味を注ぎこむ、この三重の捉えなおしは、たんにおとぎ話的な意味での変身、奇跡や魔法、暴力や侵略、絶対的な孤独における絶対的な創造なのではなく、それはまた「……」先行の諸作品がこの画家に求めていたものへの応答 (response)、つまり成就、友情でもある (P.D.M. 95)。

絵画の歴史とは、既存の作品を新規の作品が「超えながら継承し、破壊しながら保存し、変形しながら解釈する」、言うなれば世代をまたいでとり結ばれる逆説的な「友情」の連鎖に他ならない。メルロ＝ポンティはそのように言うのである。^⑦

してみると、やがて『哲学をたたえて』と「生成するベルクソン」とにおいてベルクソンがとり逃がしていると指摘されることになる。「歴史」のかの内的原理とは、メルロ＝ポンティ自身が一九四〇年代後半以降に芸術の歴史、とりわけ絵画のそれをモデルにして探りあてようとしていたものだったわけである。そして、あわせて注目すべきは、連続性^⑧と非連続性を同時にはらんだこの「友情」が、他ならぬ「呼びかけ」「応答」という用語によつて論述されている点である。ようするに、「呼びかけ」と「応答」はベルクソン批判の文脈で気まぐれに用いられた言葉ではなく、すくなくとも当該時期のメルロ＝ポンティの「歴史」の構想の核心そのものをさし示すキー・タームだったのである。^⑨

第三節 ベルクソンの（暗黙裡の）「歴史」の構想

そこにおける「歴史」概念の不在をメルロ＝ポンティによつて指摘された、ベルクソンの『二源泉』に眼を転じよう。「神々を創りだす機械としての宇宙の本質的な機能が「……」成就されるための努力」(D.S. 338: 1245)、すなわち神秘家を介した神の

愛の伝播を論じるさいに、じつはベルクソンもまた「呼びかけ」という用語を頻用している。⁹⁾メルロ＝ポンティもそのことは承知しており、しかしながらそのうえで、彼は先にもみたように「呼びかける世代や応答する世代といったもの」が「二源泉」にはないと言ひ、「そこにはただ、個人から個人への英雄的な呼びかけがあるばかりだ」(S 380)と断するのである。

だが、彼の批判を踏まえたくうえで『二源泉』を読みなおすとき、むしろ他ならぬ「呼びかける世代や応答する世代といったもの」をこそ、我々は透かし見ることができ¹⁰⁾る。

三—— 神秘家の「呼びかけ」と人々の「応答」

神秘家が人々に発する「呼びかけ」について語られている、次の一節をみよう。

彼「偉大な神秘家」の言葉が「…」我々のなかのあれこれの人のうちに反響を見いだすのは、じつは我々のうちにも、いまは眠っていてただ目覚める機会をまつている、そのような神秘家がいるからではないだろうか。「…」このとき、その人はある人格からの呼びかけ (appel) に答える (repond) のである (D.S. 102 : 1060) [9]

神秘家は「呼びかけ」を発し、人々が「応答」をかえす。注目すべきは、人々がそのようにして「応答」をかえすのが、彼らのうちに「いまは眠っていてただ目覚める機会をまつている、そのような神秘家がいる」かぎりにおいてのこととされている点である。つまり、「呼びかけ」「応答」は『二源泉』において、先行する神秘家が後続者を覚醒へと導く、そのような局面を記述するための用語として用いられているのである。¹¹⁾

そして、先行者と後続者とがとり結ぶこの神秘主義的関係は、ベルクソンにとつても文字どおり世代をまたぐものでありうる。というのも、ベルクソンはたとえば、「完全な神秘主義」の担い手と自らの考える「偉大なキリスト教神秘家たち」

(D.S. 240 : 1168) について、彼らが「人類のなかに突然、現れた」などと「事柄をはなはだ単純化」(D.S. 251 : 1176) して思い描くことをいまして、彼らが「福音書のキリスト」の「模倣者」もしくは「後継者」(D.S. 254 : 1179) であることをぬかりなく付言しているからであり、さらにはまた、当の「福音書のキリスト」自身についてもこれを「イスラエルの預言者たちの後継者」(*ibid.*) と見做しているからである。

三二 「現在が過去にたいしておよぼす不可思議な力」

上の議論にたいしては、メルロ＝ポンティ的な視座から以下のように反論をとなえることもできよう。すなわち、なるほどベルクソンの「呼びかけ」「応答」がそのようにして世代をまたぎうるものだとして、しかしながら、神の愛の伝播がけつきよくのところ理論のうえで起源に措定された「神的な人類」という外的な原理に還元されるかぎり、ベルクソンの言う「呼びかけ」「応答」はメルロ＝ポンティ的な意味での逆説的な「友情」によつて結ばれはしないのではないか。換言すれば、目的論的とも形容されえようベルクソンのな構図においては「応答」はひたすら受動的たらざるをえず、「応答」がかえつて「呼びかけ」のほうにはたらきかけるといふ「歴史」特有のダイナミズムはやはりとり逃されてしまうのではないか。たしかにメルロ＝ポンティの言うように、ベルクソンは「神的な人類」が「理論上は存在していたにちがいない」(D.S. 253 : 1178) と言い、神秘家たちのつむぎだす「呼びかけ」と「応答」との連鎖をその実現のための過程として位置づけている。とはいえ、それでもなお、彼はこの過程をけつして単線的なものとして思い描こうとはしていないし、さらには、そのように思いなしてはならないことを次のような言い方で強調してさえているのである。¹²⁾

それら「完全な神秘主義に先だつさまざまな動向」も、産みだされたさいにはそれぞれが完全な一幕 (*acte*) だったのであり、それ自体で充足していた。それらはあくまで、現在が過去にたいしておよぼす不可思議な力のおかげで、最終的な成

功により不成功へと変えられてしまったときに、始まりや準備になってしまったのにすぎないのである (DS 229: 1159)。

神秘家が新たな神秘家を覚醒させゆく連鎖のなかでは「現在が過去にたいしておよぼす不可思議な力」がはたらくものである、すなわち、後続者は先行者からの「呼びかけ」を受動的にうけとるのではけつてなく、「完全な一幕」だったはずの先行者にたいして自身の「始まりや準備」としての意味あいをあたえこれを「不成功へと変え」ることにより、むしろ能動的に「応答」するものである。ベルクソンはするように言うのである。¹⁵

だとすれば、『二源泉』にはメルロ＝ポンティのそれと相似形をなす「歴史」の構想が、それとして言及されぬままに内包されてあることになる。言うなればメルロ＝ポンティは、ベルクソンによつて措定された「歴史」の外的な原理を消しさり、ベルクソンが先んじて着目していた歴史の内的原理、すなわち「呼びかけ」と「応答」との織りなすダイナミズムを真に正当化することで、暗黙裡にはぐくまれたベルクソンのな青写真をはからずも現像したのである。

三三三 「呼びかけ」と「応答」としての「持続」

そして、「歴史」についてのベルクソンのな構想が上述のごときものであるとすれば、それは彼の「持続」概念のうちにそもそも胚胎されていたと言わなければならない。そのことは、たとえば、「連続的な創造、新しさのたえざる湧出」(PM, 9: 1259)としての「持続」について論じる文脈で登場する、『思想と動くもの』「序論」の次の一節をみれば明らかである。¹⁶

今日では、一九世紀のロマン主義を、古典主義者たちがすでに有していたロマン主義的な要素に結びつけることになんらの抵抗も感じられない。だが、古典主義のうちにあるロマン主義的な側面が引きだされたのは、ひとえに、ひとたび出現したロマン主義による回顧的な努力によるものである。[...]ロマン主義は古典主義にたいして回顧的にはたらきか

けた。「…」つまり、自らの予兆を過去のうちに創造し、先行者らによって自身を説明したのである (P.M. 16: 1265)。

「持統」は「連続的な創造」であり「新しさのたえざる湧出」なのだから、過去のうちに現在があらかじめ兆していたなどということは考えられない。この点を強調するにあたって、ベルクソンは芸術、わけても絵画の歴史に言及し、たとえば「古典主義のうちに」「ロマン主義的な要素」が先んじて存したわけではなく、むしろロマン主義のほうが「自らの予兆を過去のうちに創造」したのだと言うのである。

ここで語られているのは、まさに「呼びかけ」と「応答」の網の目としての絵画史に他ならない。とすれば、ベルクソンは、メルロ＝ポンティと同様に絵画の歴史に例を求めつつ、まさにベルクソン／メルロ＝ポンティ的な「歴史」の構想を披歴することによって、「持統」概念の核心にせまろうとしているのである。

第四節 メルロ＝ポンティ的な「歴史」の構想（の残りの一半）

上にみたように、メルロ＝ポンティ的なそれと相似形をなす「歴史」の構想が『二源泉』のうちに内包されてあるとして、しかし他方で、メルロ＝ポンティ的な「歴史」の構想は、そこからひるがえってベルクソンのそれを過不足なくその青写真と見做しうるものにとどまるものでは断じてない。さいごにこの点を補足して、本稿を締めくくろう。

第二節でみたように、『世界の散文』においてメルロ＝ポンティがとり組んだ課題とは、諸芸術（ただし、そのさい念頭におかれているのは、先述のとおりもっぱら絵画であったが）と言語との両者を範例として真の意味での「歴史」の概念を見いだすことであった。我々はそのうち芸術の歴史にかんする議論をすでに検討に付したが、もう一方の言語の歴史についてはメルロ＝ポンティはどのように考えているのか。

各々の新しい絵画はさいしょの絵画によって創始された世界のうちに場所を得、過去の誓いを成就し、過去に由来する委任状をもち、過去の名において活動するが、ただし、それとして現れているようなものとして過去を含んではおらず「…」自らを可能ならしめたものを総決算 (totaliser) しようなどともくろみはしない。これにたいし、言葉 (parole) は先へとすすむだけでは満足せず、過去を実質的に要約し、とり戻し、含みこもうとするのであり「…」自らのうちに現れることができるよう過去を調理する (P.D.M. 140-141)。

ひとしく「呼びかけ」と「応答」の網の目にはちがいない絵画の「歴史」と言語のそれとは、しかしながら、既存の作品を要約のかたちでとり込むことが新規の言語的作品にはできるが新規の絵画作品にはできない点に鑑みるならば、後続者のうちに「それとして現れているようなものとして」先行者が含まれるか否かにかんしては相異なる。メルロ＝ポンティはそのように言うのである。

「呼びかけ」と「応答」とのあいだの関係を、上述の意味あいにおける「総決算 (totaliser)」のそれとして見つめようとするこのような視座は、『二源泉』にはみとめられない。メルロ＝ポンティ的な「歴史」の構想がベルクソンのなそれをはみ出るのは、この点にかんしてのことなのである。

結語

以上、我々は、ベルクソン哲学における「歴史」概念の不在をメルロ＝ポンティが指弾すること、にもかかわらず、じつは他ならぬそのメルロ＝ポンティ的な視座からベルクソンをふりかえるときに、メルロ＝ポンティ自身の「歴史」の構想の青写真を、しかもベルクソン固有の「持続」概念に由来するものとして見いださうること、しかしそのうえでなお、メルロ

「ポンティ的な『歴史』」の構想にはベルクソンのそれをほみ出る部分のあること、をみてきた。

だとすれば、二人のあいだではベルクソン／メルロ＝ポンティ的な意味での「歴史」がまさに実演されたのだと言うべきであろう。第一に、ベルクソンのかつメルロ＝ポンティ的な意味において、ベルクソンの発した「呼びかけ」にメルロ＝ポンティは「応答」をかえした、すなわち、メルロ＝ポンティはさかのぼってベルクソンに自身の「始まり」としての意味をあたえ、これを「不成功」へと変えたのである。そして第二に、メルロ＝ポンティのその「応答」は、事後的に発見されることになる青写真としてのベルクソンのテキストを要約として含みこんでいるかぎりにおいて、過去を「総決算」せんとする、こんどは特殊にメルロ＝ポンティ的な意味での「歴史」の実践としても位置づけられるのである。

凡例

ベルクソンならびにメルロ＝ポンティの著作等からの引用にさいしては、本文中で以下の略号とともに頁数を○内に記す。ベルクソンの著作にかんしては、単行本の頁数のあとに著作集 (*Œuvres*, édition du centenaire, André Robinet (ed.), Paris, P.U.F., 1991 (1959^{1re})) のそれを併記する。

Henri Bergson

DS. *Les deux sources de la morale et de la religion*, Paris, P.U.F., 2008 (1932^{1re}).

P.M. *La pensée et le mouvant*, Paris, P.U.F., 2009 (1934^{1re}).

Maurice Merleau-Ponty

S.N. *Sense et non-sense*, Paris, Gallimard, 1996 (1948^{1re}).

E.P. *Éloge de la philosophie*, Paris, Gallimard, 1953 et 1960.

S. *Signes*, Paris, Gallimard, 1960.

P.D.M. *La prose du monde*, Paris, Gallimard, 1969.

P.P.C.P. *La primat de la perception et ses conséquences philosophiques* (exposé du 23 novembre 1946), Lagrasse, Verdier, 1996.

註

- (1) ヘルクソン哲学における「歴史」概念を問題として取りあげた貴重な試みには、たとえは以下のものがある。Jean Hyppolite, *Figures de la pensée française*, Paris, P.U.F., 1971. Messay Kébede, "Remarques sur la conception bergsonienne de l'histoire," *Les études philosophiques*, oct.-dec. 1995, pp. 513-522. Enrico Castelli Gattinara, *Les inquiétudes de la raison*, Paris, Vrin, 1998. これら先行研究の蓄積を踏まえたとき、本稿は以下に示すとおり、メルロ＝ポンティの意味での「歴史」の構想を、すなわち、メルロ＝ポンティ的な意味での「呼びかけ」と「応答」との網の目としてのそれを、ヘルクソン哲学のうちに見いだそうとする点において、その独自性を有すると言える。
- (2) 「歴史」概念をめぐるメルロ＝ポンティのヘルクソン批判をあらためて検討に付し、その妥当性を問う興味ぶかい試みとして以下の論考がある。村山達也「創造するのとは別の仕方であるいは意味の彼方に——ヘルクソンとメルロ＝ポンティにおける歴史哲学——」、『メルロ＝ポンティ研究』、一二号、二〇〇七年、一九―三四頁。本稿もこの論考からいくつかの点で示唆をうけている。
- (3) なお、これら論考においてメルロ＝ポンティはひたすら批判に終始しているとも言いきれず、その意味で両論考はある両義性をはらんでもいる。この点については、のちの註(14)であらためてふれる。
- (4) 検討の範囲をこのように限定するうえで、一定の根拠がある。『知覚の現象学』(一九四五年)刊行の一年後に、この著作が「文化

と歴史とについてはほとんど語っていない」(P.P.C.P. 68)と述べられていることから明らかなように、じつは「歴史」、それも「文化」のそれは、一九四〇年代後半以降のメルロ＝ポンティ自身の喫緊の課題でもあった。ところで、やがてその就任にさいしてベルクソン批判をも含んだ『哲学をたたえて』を講じることになるコレージュ・ド・フランス教授のポストに立候補するにあたり、一九五二年二月の選挙に先だつてメルロ＝ポンティが「自らが一九四五年以降に携わってきた」ことをマルシアル・ゲルー(Martial Guéroul、一八九一—一九七六年)に報告した「新しい研究」こそは、一九五一年頃に執筆されていたと推定されるこの『世界の散文』なのである。このあたりの経緯のさらなる詳細については、『世界の散文』に付された編者ルフォールの手になる序文を参照されたい。

(5) 当該章はその後、大幅な加筆修正のうえ「間接的言語と沈黙の声」(一九五二年)という題名で単独の論考として公表されたが、本節で引用する一節は改稿後のバージョンには見あたらない。

(6) 小田部胤久は、ここで論じられている「友情」について、「個々人の創作はすでに過去の芸術家との——そして、将来の芸術家へと(潜在的に)呼びかける点において、さらには将来の芸術家との——共同制作である」(小田部胤久『西洋美学史』、東京大学出版会、二〇〇九年、二二三頁)と述べることで、その複雑な共同性の内実を解きあかしている。

(7) なお、ここで提示されている「歴史」の構想の青写真は、ある意味では「セザンヌの懐疑」(一九四五年)においてすでに描かれていたとも言える。というのも、セザンヌという一画家の生涯をめぐる「セザンヌの懐疑」の議論が、『世界の散文』においてこゝんでは長大な絵画の歴史に適用されたとみることができるところである。この点についても、前掲の小田部論考(二二四頁)を参照されたい。

(8) 本節の冒頭でみたように、『世界の散文』においてメルロ＝ポンティがひき受けた課題は、「諸芸術」(ただし、そのさい念頭におかれているのは、先述のとおりもっぱら絵画であるが)と「言語」との両者を「範例として」「真の意味での歴史の概念を見いだす」ことである。本節ではそのうち絵画の歴史のみを考察の俎上にあげた。言語の歴史については、第四節にてあらためてこれを検討に付す。

(9) Cf. D.S. 30: 1003, 67; 1032, 85; 1046, 333; 1241. なお、『二源泉』のなかには神に発する「呼びかけ」について語られている箇所も散見されるが(D.S. 243: 1170, 273; 1194)、『本稿で問題とするのはあくまで神秘家による「呼びかけ」である。』

- (10) 三節一の議論にかんしては、以下の拙稿もあわせて参照されたい。村上龍「創造性の伝播——ベルクソン美学への一視座——」、『美学』、五七巻二号（二二五号）、二〇〇六年、二八一—四一頁。
- (11) それゆえにこそ、ベルクソンは「偉大な神秘家たちにとって重要なのは、まず範例を示して人類を根本的に変えることだ」(DS 253: 1178) と言うのである。
- (12) 以下の一節は、「のちにウラジミール・ジャンケレヴィッチ (Vladimir Jankélévitch, 一九〇三—一九八五年) によって『回顧性の錯覚』 (*Illusion de rétrospectivité*)」(Vladimir Jankélévitch, *Henri Bergson*, Paris, P.U.F., 1989 (1931 et 1959^{1st ed.}), p. 21) と名づけられることになるもの、すなわち、ベルクソンが折にふれて批判する「現実」が「可能的なものというかたちでそれ自身の実現に先だつて存していた」と考える「回顧的な」錯覚 (P.M. 1415: 1264) について、彼が『二源泉』のなかで語っている個所である。「かつては『完全な一幕 (acte)』であった」「過去」のうちに「現在の準備」を見いだそうとすることとしてのこの「回顧性の錯覚」を、我々はここで、メルローポンティの言葉を借りて言えば、「過去を捉えなおし、その続きを創出する、そのような神秘的な能力が我々のうちにはあることを強調する」(B.P. 33) 発想としてポジティヴに読みかえようとしているのである。
- (13) このような仕方での『二源泉』の読みなおしは、ある意味では他ならぬメルローポンティ自身によって提言されていたとも言える。なぜならば、彼は『哲学をたたえて』において通りすがりに、いわゆる「回顧性の錯覚」を「呼びかけ」と「応答」との織りなすダイナミズムへの着眼として読みかえることに同意しさえすれば、「ベルクソンもまた歴史の意味や進歩というものを認める」(B.P. 33) ことになるはずだと述べているからであり、また、「生成するベルクソン」のなかでも、彼はシャルル・ペギー (Charles Peguy, 一八七三—一九一四年) に仮託しながら、「歴史についてもベルクソンの直観が可能である」ことを付言しているからである。
- (14) なお、メルローポンティと同様にベルクソンもまた、上述のごとき構想を（暗黙のうちにもせよ）そだてるのにさいし芸術をモデルにしていた節がある。というのも、『二源泉』では「呼びかけ」を発する神秘家がしばしば芸術作品に、すなわち、当初は「人を面食らわせ」つつも「ただあるだけで」「新たな芸術観」を生み「公衆の趣味」を変化させる、そのような「力」をもった「天才的な作品」(D.S. 75: 1038) に、なぞらえられているからである（この点に关する詳細については、註(10)に既出の拙稿を参照されたい）。だとすれば、二人の哲学者がたがいに関形をなす構想をめぐくんだのも、あるいはごく自然ななりゆきであつ

たのかもしれない。

(15) 一読してわかるとおり、ここで問題とされているのも上述の「回顧性の錯覚」に他ならない。

本稿は西日本哲学会第六四回大会（於九州産業大学）における口頭発表（二〇一三年一月三〇日）の原稿に加筆、修正をくわえたものである。発表にさいし貴重なご意見、ご批判をくださった方々に感謝を申しあげたい。また、本稿は平成二五―二八年度文部科学省科学研究費補助金（若手研究（B））による研究成果の一部である。

（むらかみ・りゅう 山口大学人文学部 准教授）